

令和4年度 北部地区子ども支援 net 議事録

日時：令和4年6月20日（金） 13:30 ～ 16:00

場所：龍郷町りゅうがく館 講堂

参加者：※別紙参照



1. 開会あいさつ

龍郷町子ども子育て応援課 **加藤 寛之** 課長

2. 自己紹介

3. 資料説明及び事業報告

○奄美地区地域自立支援協議会（子ども部会・子ども支援 net）とは？

※詳細に関しては別紙資料参照

4. ミニ研修

「感情を調整する力の発達とその支援」

鹿児島大大学院臨床心理研究科 准教授 **高橋 佳代** 氏



<感想・質問>

◎質問

・「学校では楽しかった？」と聞くと「楽しかった」と答え、「楽しくなかった？」と聞くと「楽しくなかった」とオウム返しのように答えたり、言葉が出なかったり、する場合でも、こどもの気持ちをラベルつけし、伝え返してもよいか？

（6年生。年齢にしてはコミュニケーションに未熟さを感じるが、言葉でのやり取り自体はできる）

◎回答：言葉のラベル付けをする際におうむ返しになってしまう子どもさんへの対応について

・子どものコミュニケーションの実態を知ることができたということは大きな収穫ととらえる。支援者が働きかけたから、そのお子さんが「感情、気持ちを聞かれるのが苦手なんだ」ということが分かったといえる。

・ドキドキとワクワクならどっちかな？ 数字で0～10までならどのくらいうれしい気持ち？ 等子どもに合うやり方を見つけていく（2択くらいからはじめてもいい。）

・ラベルづけで、本人の内的な体験を振り返るきっかけをあたえることができる。きっかけを与えることで感情を体験できる。

5. グループワーク

「奄美北部での障がい児やその家族を支える人たちの連携について」

1 グループ

- ・奄美高校が、4月から通級をスタートした。（今年度は3年生から）
- ・発達に特性のある生徒だけでなく、全校生徒に向けて保護者にも説明会を開催。リハやほかの医療機関にもつないだりしている。保護者と気持ちのずれもあったりするが地域の保健師がコーディネート
- ・チャレンジサポート奄美が、心理士相談を行っているが、小学生の相談が増えてきた。WISCをとることで、発達のデコボコがわかるので、利用してほしい。（県立大島病院とも連携して必要なところにつなぐように支援している）



2 グループ

- ・地域での多職種連携に関する困り事として、療育関係から、意見が多く出された。
- ・どこに相談していったらいいかが分かりにくい。
- ・保健所でも学校に行けていない子供たちへの支援をしていることがわかった。
- ・WISC 検査にしてもどうつながっているのかが分かりにくい。現在も数が多くて待つことが結構ある。
- ・地域が狭ければせまいほど両親や親族の理解が難しいということがある。



3 グループ

- ・日常それぞれの場所で気になっていることを情報交換した。
- ・家庭、保育所、事業所、行政との連携できることが大切だと改めて感じたという意見が出された。
- ・支援体制図にはあっても、いざ困ったときに実際この困り感をどこに相談したらいいのかわかる人もいらずわからない方もいらっしゃるという状況がある。
- ・携わる支援者が相談先を理解していることで、子どもたちをすみやかに支援につなげることができる。
- ・学校と子ども部会との連携があると良い。



4 グループ

- ・お互いの職種の役割を確認できたのは良かった。（それぞれの役割がわかっていないと使える支援がわからない）
- ・共通理解が大切。学校でも保護者と支援する側（教員）との方向性の違いや、教員による支援の差を感じることもある。
- ・教員向けの勉強会や、障がい理解のための保護者向け研修も大事。
- ・子どもの困りごとを早期に見つけて、就学する前に何に困っているのか少しでも早めに発見していく。
- ・早期療育の必要性についても意見が多く出た。



5 グループ

・病院でリハビリをしている立場では、これまでどこにもひっかかっていない子が多い。そういった子たちを早い段階で療育につなげていく必要があるという意見が出された。

・支援の必要性について「保護者への理解」「気づいてもらう方法」などについて、参加者からアドバイスいただけてよかった。

・「連携」という点では龍郷町が「龍郷支援ネット」という新しい試みを行っているのを知ることができて良かった。

・保健師さんは未就学児に対応するが、小学生以上の子は誰が対応するのか。小学 1 年生の相談が来た場合、どこにつなげていくのがよいかなどの意見もあった。

・龍郷の学童でも支援シートを作っていくとのことであった。

・保育所から保育要録などを用いて学校に情報をつなぐ場合、書面だけでは伝えられないこともあり口頭でつなげることも大切であると感じているという意見があった。

・家族（親や祖父母など）への支援や理解を促すことの大切さについて話しあった。（親子遊びに参加してもらい、気づいてもらえるように工夫する。見える化を図る）



6 グループ

・未就学児、中高生、大人の支援について話し合った。

・未就学児では情報共有の在り方について意見交換。（就学に向けた学校との連携や、全学年に向けた支援のできる体制等の説明や案内）

・中高生では活動範囲も増えて SNS など親もわかっていないことがある。

・虐待の時、逃げられる場所があるという事を事前に教えておくことも大切であるという意見も聞かれた。



7 グループ

・児童クラブから宿題をやらない子どもさんの事例について話が出た。「もしかしたら本人が一番困っているのでは」「学校に相談してはどうか」「行政や学校に学童から相談してはどうか」という意見がでた。

・笠利の取り組みとして、親子教室をもっと誰でも通いやすくなるようなネーミングを考え、誰でも参加できるような雰囲気づくりを心掛けている。

・学校から保健師への相談。子ども達は療育の事業所が迎えに行くと喜ぶが、祖父母に理解されておらず、良く思われていないというようなことがある。

・小 3～4 年生くらいで、特別支援や療育に繋がる子どもさんの支援状況をたどっていくと、すでに小さいころに気づきがあったケースがほとんどである。（早期発見を親に伝えるのが難しい）

・「早期療育の場面での支援の経験値」「正しく見られる方が検査できる体制」など地域の課題がある。現在の奄美ではマンパワー不足の状況。このような地域課題について、子ども部会からも行政に働きかけられたらよい。

・支援者間で連携していくことで良い話し合いができると感じる事ができた。



8 グループ

- ・療育に対する共通理解を深めることができた。
- ・家族や祖父母について、現在でも偏見が根強くあるように感じることも多い。「療育に通うまでではない」と言われることもある。
- ・療育などの福祉的な支援に対する理解を深めていくことが大切。
- ・支援学級の良さをみんなに伝えられる機会があるとよい。（「子育ての仕方をみんなで共有できる」「こどもを認めることができる」「できることをみんなで学んでいける」など）
- ・移行支援シートの紙面だけでは情報が伝わりづらいので、直接顔を合わせて伝えることが必要と感じている。
- ・小学校は連携がしづらい。敷居が高いイメージがあるが、距離をおかないで継続して積極的に支援に関わっていけたらいい。



9 グループ

- ・子どもに関わっている「学校」「事業所」「家庭」を含めた情報共有の統一ができないかという意見が出た。
- ・学校とお母さんの連絡帳は事業所としては勝手には見ることはできないため、家庭も含めた関係機関同士の情報共有の統一を図ることができるよう、連絡帳を一つにしてはどうかという意見もあった。
- ・土日や夜間など緊急を要する際、役場に連絡してもつながらない。事業所に連絡が入るのは良いが、その後、その子に関係しているネットワークの関係者につなげることができないという問題があげられた。



その他の意見

○笠利いきいき健康課

- ・教育関係との連携事例として、笠利地区では、4月～6月の期間で、教育委員会の指導主事と一緒に、特別支援学級をまわり、保護者に対して中学入学に向けたガイドブックを用いて説明している。
- ・10月までに、保護者に知っておいてほしいこととして、4つのコース（普通学級、通級、特別支援学級、特別支援学校）を選べること等、などを説明している。（保護者も真剣に話を聞いてくれる。）